



# 境界あれこれ

7

～ 男と女 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

## はじめに

境界について色々考えているのだが、次に何を  
と思ったときに思い浮かばないこともある。今回は  
人からヒントをもらったので、男女について考  
えてみようと思う。

## 男女の違いのそもそも

生物学的には、遺伝子情報からして男女の違  
いは歴然とある。それは周知の事実であるが、  
両性具有というケースも稀に見られ、その場合

どちらの性で生きていくか迷う。知人のお子さ  
んが、男の子として生まれたと思っていたら、  
両性具有とわかり、最初は男の子として育てら  
れていたが、その後女の子に名前も変え、女の  
子として育てられていった。きっとお子さんも  
家族もたくさん悩まれたことと思う。

そもそも男と女に分かれているのは何故だ  
ろう？もっと戻って雌雄別個体になったのは  
なぜか。原始的な生物から考えねばならない。

このことは、進化の過程で、別個体であるこ  
とが様々な情報を取り込みやすく、子孫が環境  
に適應しやすく、子孫繁栄に繋がるからと言わ  
れている。

別個体同士の組み合わせによって可能性を広げていくということは分かりやすいが、その際になぜ別性になって行ったのだろうか？

鳥では、親鳥が交互に卵をあたためたり、餌をとりに行ったり、ひなを育てることもあるが、卵を産むのは雌である。この点については、子どもがどのような状態で生まれてくるかにもよるだろう。子どもが未熟で、守られて行かねばならない状況であれば、守ったり育てたりする役割と、その親子を守る役割という役割分担の問題もあったであろう。

雌雄同体であれば、相手を探さなくてよく合理的に思えるが、それでは遺伝子の多様性が望めない。そんなことから雌雄を別個体としていくことが一番合理的だったのだろうが、役割について、特別な生物を除き、雌雄双方に卵を産む機能を与えることはなかった。どちらかに卵を、どちらかに精子をとわけ、卵を育てる機能を片方に与えたことで、雌雄が分離されたことになる。

生命の進化の過程で、こうして分けられたのであれば、そのまま進化していった時に、再び雌雄が同化することは考えられるのだろうか？その点を考え始めると又別の話になりそうなので、そのことは今後の進化論に任せるとして、今現在の男女の違いについて考えてみたい。

## 男女の違いの今

対人援助の仕事をしていると、男性性とか女性性とか、或いは父性とか母性とか、男・女に関わる話が出ることも多い。あの人は男っぽくないとか、女らしいとか。或いは子どもは男の子が欲しいとか女の子が欲しいとか。人は男・女に結構こだわっているのかもしれない。

中国で一人っ子政策が行われていた時代には、女の子は捨てられたり、墮胎されたりしたというニュースもあった。日本でも家を継ぐこ

とを考えると、男子の誕生が喜ばれる傾向は今でもある。女子ばかり生まれてしまうと、養子をとったり、婿養子をとったりする家も今でもある。

一方で、男の子として生まれても、女性として生きる、いわゆる性同一性障害の人たちも多く見受けられるようになった。以前はひっそりと、自分の気持ちを隠しながら生きていたが、今はオープンになってきたし、性転換手術もなされるようになった。

更に、同性同士の婚姻も認められ、そこに人種の違う養子を迎えて家族をなしている家も、特に海外では多い。日本でも同性婚を認める方向になってきている。

こうなると、男であることと女であることの意味は余りないのかもしれない。生殖行動を考えず、自らの遺伝子を持つ子孫を残すことにこだわらなければ、家族や夫婦という考え方に男女は関係ないだろう。

また、一方で草食系男子、肉食系女子という言葉が流行ったところから、なんとなく、男女差が無くなってきたと感じられもする。

色々なことに女性が進出し、職業においても男女差が減ってきた。男性の看護師、保育士、幼稚園教諭など、全般的にその差が無くなり、男女平等参画という考え方の元で、いずれ女性の総理大臣も出るだろう。もちろん、女人禁制や男子禁制のものもまだある。歌舞伎や宝塚などがその例である。

女性の特権だったようなリストカットや摂食障害も、最近では男子に増えてきている。

生物学的には男女の違いはあるが、精神的にはその境界は曖昧になってきているように思う。このまま進んでいけば、身体的な特徴もあまり大差なくなっていくのかもしれない。例えば未来には子宮の機能を持つカプセルが作られ、そこで人工的に人間が作られて行くことになるのでは、と考えている人もいるだろう。実際そのような未来を想像して、SF映画が作られている。バイオハザードのアリスが現実にな

る可能性も、ゼロではない。

男女に分かれる必要性が無くなれば、生物学的な違いもなくなっていくだろう。それが本当に良いことなのかどうかは、今の段階では何とも言えないが、男と女の境界がこのまま曖昧になっていくのであれば、それも進化なのかもしれない。

もし、男女がわかれている必要があるなら、今一度、男女の境界をはっきりさせねばならないのかもしれない。それは差別ではなく、同等の扱いを守りつつ、女性の性、男性の性を大事にし、尊重していくことではないだろうか。DVも圧倒的に男性からのDVが多いが、それは生物学的に力では女性の方が弱いということがあった。しかし昨今女性からのDVも増えているし、力の強い、体格も立派な女性も増えているのだから、体格や力による境界ではなく、別の何か、恐らく、絶対的に異なる点によるべきで、それはすなわち、性器の違いが基点となるのではないかと思う。但し、性同一性障害については例外的に考えるべきであろうし、同性愛や同性婚は個人の自由として認めるべきで、これを境界で切り離すべきではない。

## まとめとして

人間が誕生して20万、その進化の過程で、

男女差が無くなっていくということは、恐らく人間が子孫を増やせないという危険性にさらされなくなったことも大きく影響しているのではないだろうか。医療の発達や科学の発達によって、動物界の頂点に立ち、安心安全で快適な生活をおくっている人間にとっては、環境適応を考えて、遺伝子の混合を多く試みる必要が薄れてきたと言えないか。となると、男女の境界自体今後意味がなくなっていくのではと思える。

男女の境界があることが今後例外的にとらえられるのか、それとも境界があることが当然とされるのか、50年、100年後の人間の様子はどうなのか、見てみたいものだ。

しかしながら、今の段階では、男女の差はある。従って男女の境界もある。男湯に女性が入ることはできないのもその一つである。海外の飲食店などで、トイレが混んでいたりすると、女性が男性トイレに入ることは、時折見かけるものの、逆はない。それは、犯罪を起こしやすい男性側を規制しているためであろう。

結局男女の性の問題については、堅く境界を引かねばならないときもあるが、そこまで必要のないこともある。性別や国籍などを超えて個人を尊重するダイバーシティの思想も広がりつつある昨今、それぞれの環境において必要性を見直していけば、身近な多くの場面で男女の境界は排除されていくのかもしれない。